

辞書データを基にした日英語形容詞・形容名詞の複合語形成に関する一考察

高橋 幸[†] 佐藤 滋[‡]

東北大学大学院国際文化研究科

[†]sachi@insc.tohoku.ac.jp [‡]satos@intcul.tohoku.ac.jp

1 はじめに

複合語研究の中でも、複合形容詞に関する言語間の対照研究は少なく、その内容も作例や意味用法の記述を狙いとしており[1, 2]、複合語の形成制約の考察や、統語論・意味論的検討を行なっているものはあまり見当たらない。一方、日本語には形容詞と形容名詞という機能的に類似した2つの語彙範疇が存在するが、複合語形成における範疇間の対照研究も進められてはいない。

本稿では、日英語辞書を基に複合形容詞、複合形容名詞のデータベースを作成し、その中から日英語の「名詞+形容詞・形容名詞」型と日本語の「形容詞+形容詞」型を取り上げ、内部構造と構成素間の文法的・意味的關係によって分類した。また、生産性分布から複合語形成制約を類推し、それに関して理論的裏付けを行なった。

2 データベース

分析辞書として、日本語に関しては CD-ROM 版『大辞泉』(1997 年 小学館 収録総数 22 万語)、英語に関しては CD-ROM 版『ランダムハウス英語辞典』を(1998 年 小学館 収録総数 34 万 5000 語)を使用した。

辞書データをテキスト・ファイル化し、辞書の品詞タグに従って、形容詞と形容名詞を検索した。図 1 のプロセスに沿って、複合形容詞、複合形容名詞を抽出した(図中、J は日本語、E は英語、JA は日本語形容詞、JNA は日本語形容名詞、EA は英語形容詞を示す)。

まず、検索された形容詞、形容名詞の中から、日本語のシで終止する形容詞や古典語を取り除いた。この残りが、辞書における現代形容詞である。日本語形容詞は 1,236 語、日本語形容名詞は 1,568 語、英語形容詞は 2,432 語あった。

次に、単純語と合成語の判断を行なった。その際、形態から合成語として分析可能なものだけを選択した。合成語は、複合語、派生語、畳語(例:「痛々しい」)に分けられる。

複合語と派生語の区別は必ずしも判然としない。通時的には、元来独立した語彙範疇であったものが、文法化によって元来の意味を失い形式的・抽象的な要素となり、接辞に変化することが観察される。そのため、接辞と判断する根拠として、実質的な意味を持たないことが挙げられる。接尾辞とも捉えられる「難い」「臭い」「辛い」等は、「-らしい」「-ばい」といった典型的な接尾辞と比べて、それぞれ対応する形容詞の意味の影響を受けて実質的な意味を持っている。よって、これらの要素を含む語は、複合形容詞、複合形容名詞と見なした。

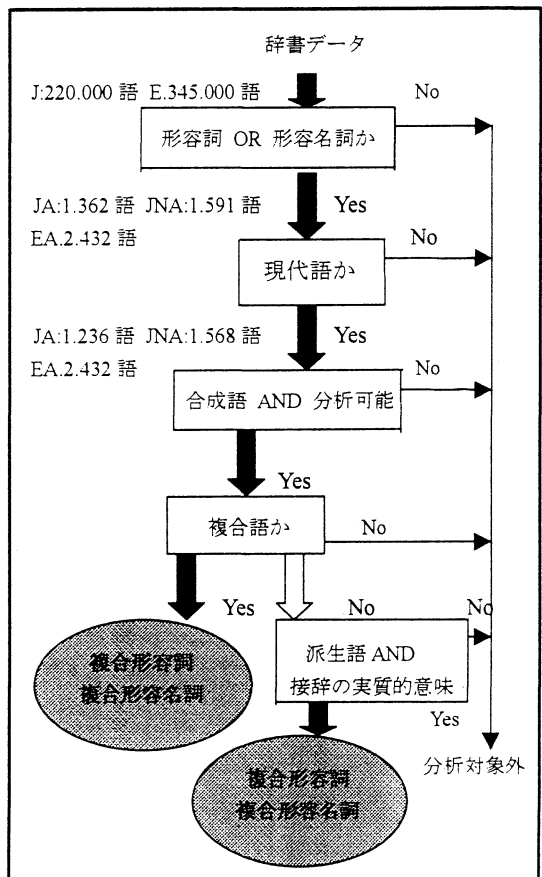


図 1 複合語決定プロセス

図1の処理の結果、日本語複合形容詞は393語(形容詞全体の約31.8%)、複合形容名詞は412語(形容名詞全体の約26.3%)、英語複合形容詞は598語(形容詞全体の約24.6%)検索できた。

検索された複合語を構成素の範疇によって分類すると、日英語複合形容詞、複合形容名詞に共通して、「名詞+形容詞(形容名詞)」型が最も多く(日本語形容詞は311語(約79.1%)、日本語形容名詞は362語(約87.9%)、英語形容詞は404語(約67.6%))、次に同じ範疇が並列された型「形容詞+形容詞(形容名詞+形容名詞)」型が続いた(日本語形容詞は33語(約8.4%)、日本語形容名詞は33語(約7.8%)、英語形容詞は45語(約7.5%))。本稿では、この2つの構造を取り上げ、各々の形成制約を考察した。

3 「名詞+形容詞(形容名詞)」型

3.1 内部構造

日本語複合形容名詞に特徴的な現象は、図2のように主要部に形容名詞ではない名詞や形容詞の語幹が生起可能なことである。

- (1) 名詞+形容詞の語幹：意地悪な、気長な
 (2) 名詞+名詞：うわ手な、他人行儀な、蓮っ葉な

図2 形容名詞の例

この要因として、次の2点が考えられる。まず、第1に、形容名詞は名詞や形容詞と共通する素性を持ち、範疇の境界が曖昧であることが挙げられる。先行研究[3, 4]では、「範疇の連続性」という考えに基づき、範疇の曖昧性を説明している。名詞や形容詞に形容名詞に近い意味や性質を持つものが存在する。

第2に、認知言語学的に「モノ」を示す語が、それが持つ最も顕著な特徴がプロファイル化され、その性質を表わすように変遷することが挙げられる[4]。例えば、「蓮っ葉な」は名詞「蓮葉女」(江戸時代、問屋や旅人宿に雇われ客の接待や寝所の相手をした女性の職業名)から由来し、そのグループの特徴であると考えられた「軽はずみで浮気なこと」がその性質を表わす形容名詞となったと推測できる。

3.2 名詞の文法機能による生産性分布

この構造型では、構成素間に文法的関係が成り立つ。まず、編入される名詞の文法機能を「主語」「直接目的語」「間接目的語」「補語」「付加部(副詞的

要素)」に分類した。図3にそれぞれの文法機能を持つ名詞が編入された複合語の例を挙げる。

- (1) 主語：「意地悪い」／「意味深長な」／“top-heavy”
 (2) 直接目的語：“life-giving”／“money-saving”
 (3) 補語：「近所迷惑な」／“language-specific”
 (4) 付加部：「目新しい」／「一目瞭然な」／
 “world-famous”

図3 名詞の文法機能

データベース内の日英語複合形容詞、複合形容名詞を文法機能別に分類した数と割合を表1に表わす。

表1 構成素間の文法関係による生産性分布

	英語形容詞	日本語形容詞	日本語形容名詞
主語	3 (0.7%)	306 (98.4%)	321 (87.2%)
直接目的語	276 (68.3%)	0	0
間接目的語	0	0	0
補語	42 (10.4%)	0	36 (9.8%)
付加部	83 (20.5%)	5 (1.6%)	11 (3.0%)
計	404	311	368

すると、生産性分布において言語間・範疇間で違いが見られた。まず、言語間の相違点として、日本語では主語となる名詞の編入が生産的であるが、英語では主語が編入しにくいことが挙げられる。また、英語において活発な直接目的語の編入が、日本語では全く起こらない。

日本語の形容名詞の複合語では補語の編入が可能であるが、形容詞では補語が編入できないことが範疇間の特徴的な違いである。

言語や範疇に係わらず共通の現象として、間接目的語となる名詞が編入不可能なことが挙げられる。

3.3 項制約による裏づけ

述語を含む複合語形成では、項構造における制約が関係する。項構造とは、述語がとる必須項を記述したものである[5, 6]。項構造は、「外項」と「内項」という階層性に分けられ、それぞれ意図的に動作を行なう動作主で、文中では主語に具現化される名詞、受動的に事象に係わる対象で、目的語に具現化される名詞が相当する。

先行研究[7]は、述語と項で形成される複合語形成において述語要素と複合するのは内項(あるいは内項が複数ある時には最も内側の直接項)の名詞であるとする、「直接項の法則」を取り上げている。こ

の法則は、日英語の複合形容詞、複合形容名詞形成においても妥当性があると考えられる。

項制約によって、3.2 の生産性分布の違いを説明する。先ず、目的語の編入について考察する。普通、形容詞や形容名詞は目的語を必須項としてとらない。しかし、英語複合形容詞の場合、主要部に動詞の分詞形が生起する型の形成が多い。そのため、動詞の内項にあたる直接目的語が編入できる。一方、直接項でない間接目的語の編入は妨げられる。

主語の編入に関しては、日本語と英語の主語の違いによって説明できる。日本語形容詞、形容名詞の主語は内項にあたる。しかし、先行研究[8]より、英語形容詞の主語は形容詞自体の項ではなく、be 動詞の項であると規定できる。よって、英語では主語にあたる名詞を形容詞の複合語の中に編入できず、言語間において顕著な違いである主語編入の程度の差が説明できる。

3.4 語彙概念構造における裏付け

英語形容詞と日本語形容名詞の補語は内項であるため、複合語に編入できる。しかし、日本語の形容詞は補語を編入できない。この違いは語の概念的意味構造における違いから説明できる。例えば、補語を複合語に編入できる形容名詞「熱心な」「迷惑な」は、概念的に「熱心になる対象」「迷惑をかける対象」といった感情や態度の＜対象＞を必要とする。同じように、英語の補語が編入される複合形容詞の主要部は、proof, resistant 等であり、その概念構造において、「耐える対象」「抵抗する対象」を必要とする。

一方、日本語形容詞で補語をとることのできる形容詞は、「うるさい」(礼儀うるさい)、「強い」(酒＝強い)、「厳しい」(礼儀＝厳しい) 等である。こうした形容詞は、それ自体では＜対象＞を必要としない。語彙概念構造における補語の役割を考えると、英語形容詞と日本語形容名詞の場合は必要性が高いが、日本語形容詞の場合は低い。よって、補語と述語の相互関係の強さから、補語編入における要因が説明できる。

3.5 複合化の階層性

日本語形容名詞は、内項（つまり主語）と補語が複合語に編入できるが、その場合、補語の方が先に複合語となっている。例えば、「騒音（内項）ガ近所（補語）＝迷惑だ」という構文において、「*騒音

迷惑な」のような主語が複合語に編入される形成は存在しない（cf. 「近所迷惑な」）。つまり、内項と補語の間には、「内項 < 補語」という複合化における階層性が存在すると推測できる。

先行研究[9]は、名詞が動詞に転換する際、同じような階層構造が存在すると言及している。外項、内項、補語、付加詞という4つの要素の中で、最も重要で際立った位置に存在するのが、外項である。逆に、副詞的要素である付加詞は重要性、際立ちが最も小さい要素であり、実際の文において表現されないことも多い。この2つを両端に据えると、その中間に内項と補語がくる。項関係における制約を受けずに編入する付加詞の場合を除けば、この階層性と反比例して複合化の度合いが決まってくると考えられる。つまり、内項は通常、目的語として文中に具現され、重要な存在である。内項と補語をとる形容名詞の複合語において、内項が複合化される場合、より重要性が劣る補語が先に複合化されていることが前提となる。

3.6 名詞の意味役割における制約

編入される名詞の文法機能における分析から、日本語の複合形容詞、複合形容名詞では、主語となる名詞、つまりガ格を伴う名詞が編入される型が生産的であることが分かった。しかし、ガ格を伴うような名詞の全てが編入できるわけではなく、名詞の意味役割によって、編入しやすいものとそうでないものがあることを以下に示す。特に、感覚や感情を表わす形容詞が述部となる場合、名詞の意味役割が異なる場合がある。

図4の(1)-(3)のガ格を伴う名詞は、主体以外の深層的な意味を持つ。

- | |
|---|
| (1)「場所（身体部位）」：腹ガ黒い、心ガ悲しい
→腹黒い、心悲しい |
| (2)「誘因」：石ガ痛い、罪ガ憎い、お化けガ怖い
→*石痛い、*罪憎い、*お化け怖い |
| (3)「目的語」：金ガ欲しい→*金欲しい
冬ガ苦手だ→*冬苦手だ、 |

図4 名詞の意味役割と例

(1)のような例は複合化され、語彙化しているものが多いが、(2)(3)は複合化されない。(3)の目的語にあたる名詞が編入されない要因として、日本語の形容詞、形容名詞において、目的語は必須項ではないので項構造に組み込まれず、複合語に編入できない

ことから説明できる。(2)は、主体の属性を表わすガ格に比べて名詞と述語の関係が曖昧である。特に「石ガ痛い」に関しては、文脈から意味を類推するしなければならない。形容詞、形容名詞構文におけるガ格の意味役割と複合化の関係について考察すると、図5のように表わすことができる。

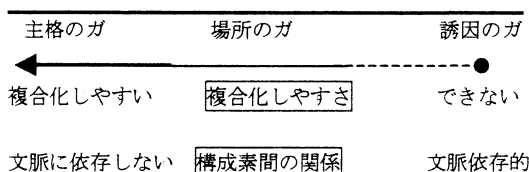


図5 構成素間の関係と複合化

4 日本語「形容詞＋形容詞」型

4.1 形容詞の並列順序

従来、この型は同じ範疇同士が並列されている構造として、複合語形成制約について特に検討されてこなかった。しかし、構成素の形容詞を種類によって分類すると、形容詞の並列順序に一定の規則性があることが分かった。

まず、先行研究[10]に従って、構成素の形容詞を対象の属性を表わし、客観的な意味を持つ「属性形容詞」と、感覚や感情を表わし、主観的な意味を持つ「感覚・感情形容詞」に2分類した。

すると、形容詞の並列パターンとして、図6の3つが存在した。図中の数字は、データベース内における数である。「感覚・感情形容詞＋属性形容詞」というパターンは存在しなかった。

(1)「属性形容詞＋属性形容詞」	(24)
(2)「感覚・感情形容詞＋感覚・感情形容詞」	(1)
(3)「属性形容詞＋感覚・感情形容詞」	(8)

図6 形容詞の並列パターン

4.2 形容詞の意味変化

複合化により意味変化が起こった形容詞も存在する。「堅苦しい」「狭苦しい」「むさ苦しい」等、主要部に「苦しい」を伴う複合形容詞である。

「苦しい」だけなら、主体の主観的な感覚・感情と客体の客観的な属性の意味の両方を表わすことが可能である。

しかし、別の形容詞と複合化すると、対象の属性の意味しか表わさなくなる。「彼ハ堅苦しい奴だ」といった場合、主語「彼」の感情や感覚ではなく、

その属性を表わす。このような意味変化は、「聞き苦しい」や「見苦しい」のような「動詞＋形容詞」型にも起こるが、「息苦しい」「心苦しい」のような「名詞＋形容詞」型には起こらず、両方の意味を持ち続ける(例:「感覚・感情」:彼女ハ息苦しい、「属性」:この部屋ハ息苦しい)。

「苦しい」を主要部に伴う「形容詞＋形容詞」型複合形容詞は、複合化により客体の属性を表わす意味だけを持つことになり、意味が客体化したといえる(一方、「心細い」等の場合、属性を表わす形容詞「細い」が複合化により、主観的な感覚・感情を表わすように変化しているものも存在する)。

5 終わりに

日英語共に、名詞を挿入する複合語形成では句構造における項構造が語に投射され、整然とした規則性が成り立っている。日本語では項制約の他に、名詞の意味役割や形容詞の意味特性、主観性・客観性といった意味的・認知的要因も複合化に深く関わっている。今後は、更に他の形成要因の可能性を探ると共に、句構造との比較から複合語の生起環境や機能を考察していく予定である。

参考文献

- [1] 長嶋善郎 (1980) 「語構成の比較」 國廣 (編) 『日英語比較講座 1 音声と形態』. 237-283. 東京: 大修館書店.
- [2] 竝木崇康 (1988) 「複合語の日英対照－複合名詞・複合形容詞－」 『日本語学』 7: 68-78.
- [3] 寺村秀夫 (1982). 『日本語のシンタクスと意味 I』. 東京: くろしお出版.
- [4] Uehara, Satoshi (1998) *Syntactic categories in Japanese: a cognitive and typological introduction (Studies in Japanese linguistics vol. 9)*. Tokyo: Kuroshio Shuppan.
- [5] Grimshaw, Jane (1990) *Argument structure*. Cambridge, Mass.: MIT Press.
- [6] Jackendoff, Ray (1990) *Semantic structures*. Cambridge, Mass.: MIT Press.
- [7] Levin, Beth & Malka Rappaport (1986) The formation of adjective passives, *Linguistic Inquiry* 17: 623-661.
- [8] Jackendoff, Ray (1977) *X' syntax: a study of phrase structure*. Cambridge, Mass.: MIT Press.
- [9] 影山太郎・由本陽子 (1997) 『日英語比較選書 8 語形成と概念構造』 東京: 研究社出版.
- [10] 西尾寅弥 (1972) 『国立国語研究所日本語教育指導参考書 13 形容詞の意味・用法の記述的研究』 東京: 秀英出版.